名前の話

ソチ５輪のラージヒルジャンプ団体で銅メダルを獲得した４人の日本男子の先頭を務めた２０歳の清水選手、名前に送り仮名が振ってあった。礼留飛（れるひ）、何と呼んでいいか大方の人には判らない名前だからだろう。舌を噛みそうな名前と思うのはスキーとはトンと縁がない藤四郎（とうしろう）の考えらしい。礼留飛とは１００年前の明治時代末期に日本でスキーを紹介、指導したオーストリアの軍人レルヒの当て字だそうだ。偉大な功績を称えて彼の銅像が新潟県上越市には建立されていることでも明らかである。であるから、２０年前に清水家の男児誕生を祝って誰かが命名したことであることが判明する。父母であるか祖父母かはたまた仲人とか。将来、レルヒ氏を見習って偉大なスキー選手になって欲しいとの願いが籠められていたに違いない。そうしてソチの５輪で見事にその願いが叶った。

何故、急に名前のことを持ち出したかと言うのは、先日（２月２３日）、秩父宮ラクビー場でラグビー試合を観戦した、天皇、皇后が案内説明役の協会会長へ、ヤマハ発動機のＦＢ（フルバック）五郎丸選手の苗字に【本名ですか？】と訊ねられたとの報道があったからである。名前なら分かるが姓名としては珍しいものと天皇も感じられて、そうお尋ねになっただろうと読み取れる。そういえばテレビ番組で以前、奇妙、珍妙な姓名に関するクイズを見たことがある。へえー！というばかりの感想を覚えている。総務省発行の人口白書によれば、日本にはおよそ３０万種に及ぶ苗字があるとされる。中でも多いのが筆等の佐藤さん（２０５万５０００人）、続いて鈴木さん（１７９万９０００人）、高橋さん（１４９万５０００人）、田中さん（１３万７７００人）、伊藤さん（１１万３９００人）と続いている。我が故郷の山梨県も調べてみると１位に渡邊さん、２位に小林さん、３位に望月さん、４位清水さん、５位佐藤さんとなっている。因みに我輩の姓名の大柴は、173位に位置するらしい。その大柴という姓名に関して、実はイヤな思い出が心の片隅に甦るからである。

今から３０年ほど昔、昭和５８年（１９８３年）９月、山梨県須玉町（現北杜市）の北方に聳える瑞牆山で猟奇殺人事件が発生した。東京のＯＬが一人登山をしていたのを見計らって山小屋の５０歳の管理人が強姦のすえ殺人に至り死体を遺棄した事件であった。報道は全国規模に広がり、殺人犯大柴の名前はあまねく知れ渡った。

私は当時４３歳、東京銀座で寿司屋を営んでいた。突然のテレビ、新聞報道に

うろたえた覚えがある。無論、お客さんや築地の人々は私の姓名などは知らない。もっぱら屋号である（こつるぎ）で通っていたわけだが、何人かの従業員には店主である大柴の姓名は知られていたから妙に坐り心地が悪かった。出身県が山梨であることや姓名が同じであることで、彼等にしてみれば容疑者とオヤジさんは関係はないか、つまり、親族、縁戚ではないかという意識が働くのは想像に余りあった。さらに懸念したのは、故郷山梨の小学校、中学、高校の同期生等の中に、寿司屋の大柴と強姦殺人犯の大柴の関連を結びつける思考が無きにも非ず、という思いだった。

まさか、そんなことは全然、思わないよ、余計な取り越し苦労だよ、と口を揃えるに違いない、しかし、人の心には妙な蠢（うごめ）きが兆すものである。他人の不幸は蜜の味、という由々しき皮肉を充分認識しているからだ。大柴はあの犯人の親族だって、という空想。ゆえに当時の私は世間体ということを非常に恐れた。そんな思惑があって、私は、昭和５８年１２月５日発行、月刊【新山梨・・・発行人備仲臣道君・甲府一高同級生】１６号へ、（世間体）と題して原稿用紙６枚ばかりのエッセイを発表した。

３０年前の掌編を再度、転載してみようと思う。

（世間体）

実に妙な手紙を印刷して、それを友人や知人達へ出す破目になった。その顛末を述べることにしよう。

其の事件が夜十時台の僅か五分位の短いテレビニュースで報じられた時、私は思わず顔を顰めてしまった。癌特集のドキュメント番組が終了して煙草の恐ろしさが未だ眼に焼きついているうちである。突然、テレビの中から私の姓が呼ばれたのであった。家人の「あれっ」という小さな漏らし声の横で私はいやーな感じを抱いてしまった。殺人事件という白いタイトル文字と、瞬間に消えていった自分と同一の姓が、恰も私自身のことのような感じで、いささか不快を覚えたのだ。

「瑞牆山」へ登山していた東京の若い女性が、山小屋管理人に暴行された上に殺されていたという極めて猟奇的な殺人事件であった。

尋常では考えられぬ山の番人の犯罪である。暴力団同士の抗争とか、金銭上のもつれ、或は怨恨の果てであるとか、夫婦別れの話がもつれて、といった類（たぐい）の

殺人は新聞の社会面で日常お目にかかるが、この事件は少々性格の異なる向きがあった。もっとも殺人事件などに程度の差異などが露ほどあるわけはない。登山家達の信頼を揺るがした驚愕、女性登山客を暴行の上殺してしまう、などという凡そ考えられぬ犯罪は、あらゆる人達の耳目を奪い衝撃を与えたのである。そうして、その犯人が私と同じ姓であり犯行場所が、私の出身地県であるという事実が私を深い困惑に陥らせてしまった。

「いやーね」

家人が、ぽつりと言った。私は無言で頷いた。

翌朝、私は、すっかりそんなことを忘れていた。６時３０分、魚河岸へ買い出しに出かけるために起床して一服しながら新聞を拡げてみて、驚いてしまった。昨夜の事件が社会面のトップに大きく採り上げられていたのである。

山小屋の前での写真が一枚、殺された若い女性の顔写真と並んで犯人の、面長で額の禿げ上がった写真も載っていた。大きな活字の見出しが躍る。

『山小屋管理人が殺す

登山のＯＬ変死（山梨）

単独つけ込み凶行

うそ証言　捜査振り回す

山梨県北巨摩郡須玉町の秩父山系瑞牆山に今月三日、一人で登山に出かけたまゝ、行方不明になっていた東京都武蔵村山市大南三丁目、会社員Ｉさん（２２）が、十九日に同山中で変死体で見つかった事件を調べていた同県警韮崎署は二十三日夜、瑞牆山中腹の富士見平小屋管理人、同郡須玉町東小尾、大柴某を婦女暴行致死、死体遺棄の疑いで逮捕した。今年二月に登った瑞牆山の美しさに魅せられ、たった一人で再び訪れた女性登山客を力ずくで殺した大柴の犯行は、登山者と山の番人ともいえる山小屋管理人の信頼関係を踏みにじるもの、と地元山岳関係者にショックを与えている』

事件のあらましは、以上であった。

記事を読みながら私は昏い気持に襲われた。

『大柴某は両親、妻、娘との五人暮らし。小屋から十五キロ離れた自宅で農業をするかたわら、六年ほど前から、須玉町増富観光協会の経営する富士見小屋の管理人をしていた。酒好きで小屋にいるときも昼から酒を呑み、これまでにたびたび女性登山客にいたずらをした』

『涙ながらに語る父親、

管理人だけは信じていたのに』

そんな活字が次々に眼に飛び込んできた。

いつもなら、その苦味が心地好く喉を通るお茶を、私は途中で残してしまった。あーあー、と口を吐いて溜め息が出た。気分がすぐれない。

その日一日心の片隅に事件の拘りがあった。夜遅く仕事が終わってから、ぼんやりと考えてみた。大柴姓は少ない。しかし又、由緒ある系統というべきものでもなかった。誰もいなくなった店の中で私は個人別の電話帳を開いた。分厚い電話帳の一行に私と同じ姓が並んでいる。数えてみると、１０３名あった。無論、これは登録者の名前であるから、その家族達を含めると４～５００人の数字になるに違いない。しかし、である。１０００万人の都民の中で、これだけの数字が同一の姓と考えると、私の心配事が有り得るのだ。

一瞬、私と其の犯人を結びつける妄想が兆す、親族、縁戚者と結び付けないかという杞憂である。

私の憂鬱の原因はそこにある。店で働いている従業員達が、短絡な連想をしていないだろうか、知人、友人が、この事件の向こうに私の姿を浮かべていないだろうか、そう考え始めると、この同姓の犯人に対して無性に腹が立ってきた。

まさか、大柴さんの親戚なんかじゃあないでしょうね、笑顔で、そんなことを訊く姿が想像された。大勢の知人、友人の頭の中を横切るだろう揶揄の感情さえ予見される。

結局、私は世間体が気になって仕方なかったのである。それで到頭、次のようなハガキを印刷した次第だ。

今般、山梨県瑞牆山で起こった山小屋管理人の女性登山客への婦女暴行殺人事件の犯罪で、犯人大柴某は、私と同姓同郷でありますが、親族、縁戚ではありません、どうか、お含みおき下さいますことをお願い申し上げます。ひとこと、世間体を考えました末、皆様にお知らせいたします。

私は、それらのハガキをポストへ投函した。ハガキが手元を離れた瞬間、じゃあ、仮に犯人の親族、一族に繋がっていたならば如何に対処するであろうか、という疑問が沸々と沸き起こった。

何日かのち、もう一度、事件が載った新聞を取り出して、おそるおそる開いてみた。すると得体の知れない憂鬱が私の全身に這い登って来た。

以上が３０年前に書いた全文である。７３歳を迎えた今、読み直してみても当時の心境は実に鮮やかに分かる。戸惑いに揺れたあの頃、小心翼翼としたちっぽけに動揺する私の姿が垣間見られる。実際はハガキの印刷もしなかった。もっぱら、おのれの内面に生まれた意識の呟きを書き連ねたに過ぎない。

名前から始まった忌まわしい記憶が連面として続いたのは、深夜、寝床の中のことだった。

大柴姓は明野村（現北杜市）に多くあるらしい。柴は小さな雑木の意味を持つと国語辞典にある。

明治８年（１８７５年）に姓名を義務化する法律が施行され、それまでは武士と一部特権階級だけであった姓を庶民も許されて持つようになったのであるらしい。高々１４０年の歴史しかない庶民の姓名。柴の付く姓には、小柴、中柴、大柴、柴田、柴崎、柴山等々、数々ある。

民話の（桃太郎さん）の冒頭は、【おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に・・・・・】から始まっている。薪用（雑木）の柴刈りをするおじいさんの何と微笑ましい背負子姿ではないか。

殺人犯大柴某は懲役１３年の刑罰を受け１９９７年には既に出所しているという。その後の足取りは、と興味が湧くところだ。地元で生活できる訳もないだろうから、前歴を問わない大都市のスラム街へ潜り込んだか、それともホームレスとして生き延びているのか。懲役１３年は私としては不満である。短過ぎる。一方、家族、取り分け両親、奥さん、娘さんの、その後はどうなっただろうという関心も起きる。奥さんは離婚して旧姓に戻り娘さんを連れて他県（東京も含めて）へ転居する方法があるが、７０代か８０代であろう両親はどうしたのかなと思う。雨戸を閉じ近所付き合いも失いひっそりと生きるしか術はないのかな、人を殺めた我が子の不始末に、痛切な哀れを覚えてしまうのだ。首でも括って世間へお詫びをしなければと思うだろうか、父親も母親も追い詰められたであろう。血の繋がりのある娘さんのその後は？。

いずれにしても犯罪者を出した家族、一族の困惑は尋常ではなくなる、家族は崩壊し生活の基盤を喪失する。

何処に犯罪の根が潜んでいるか、誰もが不確かな世の中に生きている。性格の破綻とか弱さから来るものと言えばそれまでの話で、面妖で厄介な心理を持つ連

中はゴマンと存在する。